

『モイラ』再読のころみ (2)

—ジョゼフの《violence》の分析を中心に—

井 上 三 朗

目 次

0. はじめに
1. 神への志向
2. 肉なるものへの志向
 - (1) プレローとの決闘
 - (2) マック・アリストアへの暴力
 - (3) モイラのベッドに身を投げる
 - (4) 肉体の交わりと殺害行為
3. 《violence》と信仰の関連
 - (1) 〈火〉(または〈光〉)のイメージ
 - (2) 二つのviolence?
 - (3) 宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき
 - (4) 宗教的高揚と肉体的高揚との混淆
 - (5) 《violence》再々考
 - (6) 犯罪後のジョゼフ
 - (7) 救いの問題
 - (8) 《violence》と信仰との関連
4. おわりに

(太字は今回掲載分)²⁰⁾

2. 肉なるものへの志向

(3) モイラのベッドに身を投げる

ここまで、ジョゼフの中の、肉なるものを志向する部分を検討するため、プレ

ローとの決闘（I-5）と、マック・アリスターに暴力をふるう場面（I-15）とに焦点をあわせ、そこにいたるまでのいきさつを明らかにしつつ、この二つの場面を分析してきた。こんどは、ジョゼフがモイラのベッドに身を投げる場面（II-6）を吟味したいのであるが、まず先に、第一部第十六章以後、この場面にいたるまでの経過を説明することにしよう。

マック・アリスターを鞭打ったあと、ジョゼフはしばらく宗教的なもののほうに向かう。第一部第十六章におけるマック・アリスターへの謝罪と、彼との和解のころみは、キリストの教えにもとづく宗教的な実践であるとみなすことができるし、第一部第十八章（最終章）では、ジョゼフはデーヴィドと二人で、暗闇の中で神に祈り、至福の感情をあじわっている。さらに第二部第二章において、ジョゼフは聖書を読んで感動し、自己の救いを確信している。このように、第一部第十六章以降、ジョゼフは暫時、信仰によって生きるのである。

とはいえ、ジョゼフを肉体的なものの方に向かわせる要素も散見できる。第一は、マック・アリスターの部屋でジョゼフがみかけた『ポリス・ガゼット』の雑誌である（I-16, p.82）。この雑誌は裸体の女の写真を載せており、ジョゼフを肉なるものの方へいざなっていることは疑いをいれない。第二の要素は、学生たちの、性にかんするみだらな会話である。第一部第十七章で、ジョゼフは夕食の際、マック・アリスターがいかかわしい場所に行っていることを聞き、くわえて第二部第一章では、同じ日の夜、隣室にあつまった学生たちのかわす、肉体とセックスについての卑猥な会話に目をさまされている。学生たちのみだらな会話は当然のことながらジョゼフを反撥させる。しかし同時に、肉なるものへの意識を植えつける役割を果たしていることはたしかであろう。

ジョゼフを肉なるものに接近させる第三の要素は、女中ジェマイマの話である。第二部第二章、日曜日の朝、女中ジェマイマはジョゼフの部屋を掃除するため、部屋に入ってくる。その折、ジェマイマは、ジョゼフの使っている部屋が、デア夫人の養女のモイラのもので、モイラが綺麗な娘であり、そして、モイラがかつてベッドを部屋の真ん中に、すこし斜めに置いて寝ていたことを伝えるのである（pp.96-7）。ジェマイマの話はジョゼフに衝撃をあたえる。ジョゼフのうけた衝撃の深さは、次章で、教会からもどったジョゼフが自室のベッドをみて、「ぼくはもうこのベッドでは寝ないぞ」（II-3, p.98）とつぶやいているところからうかがえる。ベッドは、以前モイラがそこで寝ていたがゆえに、肉体的に誘惑するものとして認識されているのである。

ジョゼフはサイモンの死をきっかけにして肉なるものの方へ傾斜していくこ

とになる。サイモンと同郷のキリグルーからサイモンの死を知らされたジョゼフは、キリグルーと別れたあと、図書館に行き、死んだサイモンのことを思う。そして図書館を出たジョゼフは自室にもどる途中、雨に濡れた土の匂いに酔いしれ、「こころよい気持ち」をあじわう（II-6、p.104）。この陶醉は、白い木蓮の花の匂いをかいで得たよろこび²¹⁾と同様に、官能的なものであろう。それから、ジョゼフは夜のすがすがしい空気を吸いこみ、「満足感」をおぼえ、「常軌を逸した生きることのよろこび」を感じている（p.104）。ここでの「満足感」「よろこび」が地上的=肉体的なものであることはまちがいない。また、ジョゼフは不意に「駆けだしたいという欲求」（p.104）にかられている。この欲求は、ジョゼフのうちにやどる肉体の力にうながされて生じたものと思われる。生の歓喜は帰宅ののちもジョゼフをとらえる。死んだサイモンが雨の音を聞けないのに、生きている自分は聞けるという思いが、ジョゼフに「不可解な幸福感」（p.105）をもたらすのだ。この「幸福感」もまた、地上的=肉体的なものであることは指摘するまでもない。そしてジョゼフは「未知の力」に揺りうごかされて、指でからだをまさぐるのである（p.105）。ここでの「未知の力」が肉体の力、欲望のエネルギーを意味することは明明白白である。このように、サイモンの死の知らせは、この世に生きていることの実感をジョゼフにいだかせ、ジョゼフを地上的=肉体的なもののように向かわせるのである²²⁾。

ジョゼフの欲望は、このあと彼が寝床につこうとするとき、いよいよはっきりとした輪郭をとるにいたる。ジョゼフは暗闇のなかで寝巻きに着かえ、ひざまずいて主の祈りとなえる。だがそのとき、「ベッドの位置を変えようという奇妙な考えが心にうかぶ」（II-6、p.106）。この考えはどうしようもなくジョゼフにとりつき、ジョゼフは、かつてモイラがそうしていたように、ついにベッドを部屋の中央にひっぱり、斜めに置く。ジョゼフの行為はまだ見ぬモイラへの思いに彼がとらえられていることを明示している。ジョゼフのそれからの行動は次のように語られている。

「ベッドを一周したあと、彼はおずおずとした、それでいて愛撫するような仕草で、枕とシーツの上を指先でそつとなでた。突然、彼はその狭い寝床の上に身を投げた。するとバネが体の重みできしんだ。彼は長々と体をのぼした」（II-6、p.106）。

以前、モイラの所有物であったベッドに身を投じる間際、ジョゼフが「おずおずとした、それでいて愛撫するような仕草」で枕とシーツをなでている点は注目に値する。この時点において、モイラへの思いがジョゼフの脳裡を占めているのであるから、彼の仕草はまぎれもなくerotiqueな意味あいを帯びている。置きか

えられたベッドは枕やシーツとともに、モイラの代用品となっているように思われる。ジョゼフがベッドに身を投げるとき、モイラと合体し、あるいはモイラを所有したいという欲求がジョゼフを支配していると考えられるのである。ここにおいて、ジョゼフの肉体的な欲望は明確なたちをとって一気に爆発したとみなせよう。しかも、プレローとの格闘、マック・アリスターへの暴力の場合とはちがって、ここでは行為の意味が当人にもはっきりと理解されることになる。それゆえ、ベッドに身を投げるといふ行為は、はじめて自覚的に生きられた、欲望(肉体的高揚)の体験だといえるのである。

(4) 肉体の交わりと殺害行為

このようにジョゼフは第二部第六章、モイラのベッドに身を投げることによって、自らの肉体的欲望をはじめて意識する。自覚された欲望は当然ジョゼフに罪悪感をいだかせ、宗教との葛藤をひきおこすことになる。第二部第七章以後、ジョゼフの内心では、肉体と魂の相剋がくりひろげられ、ジョゼフは欲望(肉体的高揚)と信仰(宗教的高揚)とのあいだをひんぱんに揺れうごく。そしてさいごには、欲望が勝ちを征し、ジョゼフはモイラを相手に肉体のあやまちをおかし(II-21)、モイラを殺害してしまうのだ(II-22)。では、こんどは、ジョゼフがその悲劇的な結末にいたる過程をごくかんたんにたどってみることにしよう。

ジョゼフはモイラのベッドに身を投げた日の翌日、自分の罪深さを知り、デーヴィドの住むファーガスン夫人の下宿にかわる。第二部第九章で記述されているように、その日の晩、ジョゼフは前日の夜の罪あるふるまいをあがなうために、ベッドで寝るかわりに床板の上に身を横たえる。けれどもこの苦行もむなしく、ジョゼフはモイラへの思いにとりつかれ、モイラのからだを想像してしまう(p.117)。

そして第二部第十章で、ジョゼフはついにモイラと出会う。デア夫人の下宿に置き忘れてきたセーターを取りに行ったとき、故郷にもどったばかりのモイラに出くわすのだ。このはじめての出会いで、モイラの、口紅を塗りたくった唇と赤い服とがジョゼフの注意をひき、モイラの官能性・肉体性を感じさせるものとして記憶の中にとどまることになる。また、床の上にセーターを投げ、それをジョゼフに拾わせたモイラの傲岸な態度が、逆に言えば、怒りをおぼえつつセーターをひろったときの自らの屈辱的な姿勢が、ジョゼフの脳裡に焼きつくことになる。事実、第二部第十一章、チョーサーにかんする授業に出ているとき、ジョゼフはモイラの赤い服と赤い唇を、反感をいだいて思うかべ、そしてモイラのまえて屈辱的な姿勢をとったことを振りかえり、怒りの中で暴力への欲求にかられてい

る (p.125)。第二部第十二章では、ジョゼフは嫌悪の念をいだいて、モイラの赤い服をその着こなしとあわせて思い返している (p.128)。さらに第二部第十四章で、ジョゼフはデーヴィドと講義に行く途中、大通りでモイラとすれちがうのであるが、このときもモイラの唇の赤さに注目し、そのことをデーヴィドに話している (p.140)。また、このあと大学構内でプレローをみかけたとき、ジョゼフは、セーターを取りに行ったのがプレローである場合のモイラとプレローの態度を、自分の受けた屈辱と対比しながら想像することで「怒りの発作」にかられている (p.140)²³⁾。このようにジョゼフはモイラの赤い唇と赤い服に反撥しながらもそれを思い出し、あるいは注目し、そしてセーターを拾わせたモイラの横柄さと自己の屈辱を振りかえっては怒りの感情にとらえられているのである。

しかしながら、反撥をもってであれ、怒りをいだいてであれ、モイラのことを想起することは、つまるところ、モイラに心をうばわれ、モイラのとりこと化すことにほかならない。反撥は執着の裏返しへの反応であるし、モイラへの怒りは、プレローへの怒りと同様に、欲望のあらわれと解することができる。ジョゼフじしんも、「彼女 [モイラ] はおそろしく魅力的だった」(II-18, p.150) とみとめ、「セーターを拾うため、怒りに胸をふくらませて彼女の前で身をかがめたまさにその瞬間、彼にはすでにもう自分の自由がないのだった」(p.150) と回顧しているごとく、モイラに魅せられ、モイラへの情熱に隷従してしまったことを痛感している。さらに第二部第十七章では、ジョゼフはデーヴィドに、自分の胸のうちを次のように語っている。

「ぼくは、自分が犯さないこの罪 [肉体の罪] をぞっとするほど望んでいるのだ。君はこの肉体の飢えがどういうものであるのか、わかっていない。ぼくは時として、肉体から切り離されているような気がする。それは、あたかもぼくの中に二人の人間がいて、一人が苦しみ、もう一人が苦しんでいるのを眺めているかのような具合なのだ。(…)

ぼくが考えている一人の女性がいる。(…)その女は神さまとぼくとのおいだに立ちあはだかっているんだ」(p.148)。

この告白から明らかなように、ジョゼフはモイラへの肉体的欲望にひき裂かれていること、ならびに、モイラのせいで、もしくはモイラへの情熱のせいで、自分が宗教からひき離され、神のほうへ向かいえないことを自覚するにいたるのである。

ジョゼフがモイラへの情熱・欲望を確認するまでの経過、つまり、肉なるものを志向するいきさつを要約してきた。けれども第二部第七章以後、肉体的高揚と

平行して、あるいはからみあって、宗教的高揚を示す箇所もみいだされる。カトリックの学生テレンス・マック・ファドンにたいする信仰上の反撥（II-11）²⁴⁾とこの学生を改宗させたいという欲求（II-14）、デーヴィドの婚約を知ったときの宗教的反撥（II-12）、自己の純粋さをもとめての神への祈り（II-13）、デーヴィドへの、罪と信仰の告白（II-17）がそれである。そして第二部第二十章において、はげしい伝導熱と信仰がデーヴィドにぶちまけられることで、ジョゼフの宗教は狂信的な領域にまでおよぶのである。

だが最高潮に達した宗教的高揚は、まもなく肉体的高揚によってとって代わられることになる。第二部第二十一章、デーヴィドとの会話をおえて自室にもどったジョゼフは、彼を誘惑するために待ちうけているモイラに遭遇するからだ。ジョゼフの宗教を笑いものにするため、学生たちはモイラをジョゼフの部屋におもむかせるといふ陰謀をたくらんだのである。ジョゼフはモイラを無視・黙殺することによって、誘惑とたたかおうとする。モイラをまえにしたジョゼフの内心の葛藤は、以下のようにえがかれている。

「彼〔ジョゼフ〕が彼女〔モイラ〕を欲したとしても、彼のあやまちではなかった。彼の男としてのからだは彼女を欲していた。しかし肉体は、もしそれに屈すれば、人を地獄に連れて行くのだ。彼のからだは欲するものを、彼の魂は望まなかった」(p.170)。

ジョゼフが必死になって肉体的欲求とたたかっていることは、一読して明らかである。一方、モイラのほうは、友人のセリナあてに手紙を書き、時間をつぶそうとする。しかしモイラは、これまでに相手にしてきた男たちとはちがったものをジョゼフのうちにみだし²⁵⁾、ついにジョゼフへの愛にめざめる²⁶⁾。こうしてモイラはジョゼフを誘惑することをやめ、部屋を立ち去ることにする。けれどもモイラが部屋を出て行こうとしたとき、鍵が胸からすべり落ちる²⁷⁾。ジョゼフが鍵を拾うために身をかがめる。この瞬間、モイラがジョゼフの髪に触れる。このことがひき金となって、それまで抑えられてきた欲望が堰を切り、氾濫し、ついにジョゼフはけだもののようにモイラに襲いかかるのである。肉体の交わりを結んだあと、二人は眠る。第二部第二十二章の冒頭の、ジョゼフが眠りからさめたときの記述をみておこう。

「息苦しい感覚が彼〔ジョゼフ〕を眠りからさました。(…)彼の視線は天井に向けられた。彼は光を目にしたが、はじめのうちそれが何であるのかわからなかった。というのも、その光は火事の反映に似ていたからである」(p.173)。

ここで〈光〉の描写がなされていることは注意を要する。「火事の反映に似」たこの「光」(lueur)はベッドの下にころがった小さなランプが投げかける光である。

そしてランプは、ジョゼフがベッドの上でモイラと争っているときに落ちたものであることから、〈光〉はジョゼフの情熱・欲望もしくは《violence》を暗示し、象徴していると考えることができる。

ジョゼフはこのあと、傍らに幸せそうに眠るモイラをみとめ、噴怒のなかでモイラを絞殺する。そしてモイラの亡骸に服を着せてからふたたび眠りにおちいるのである。

「服を着せおわるや否や、彼は死者のそばにあお向けにどっとたおれた。そして深い眠りのなかに沈んでいった。

長い時間がすぎて、(…)彼は目をあけた。同じ火事のような光が天井を照らしていた」(p.174)。

このようにジョゼフはモイラを殺害したのち、モイラと肉体の交わりをもったあとと同じように眠りにおちいつている。この眠りは二つの行為の、すなわち性行為と殺人行為との質的な類似性を示していると思われる。つまり二つの行為は、どちらも《violence》のあらわれとみなされるのである。性行為ののちの眠りは、明らかに肉体の力、欲望のエネルギーが急激に消費されたことに起因している。モイラ殺害後の眠りも同じ理由にもとづくのではないだろうか。この点にかんして、二度目の眠りからさめたあと、「同じ火事のような光」(La même lueur d'incendie)が「天井を照らしてい」ることは、注目される。この〈光〉もまた、ジョゼフの情熱・欲望あるいは《violence》を暗示・象徴しているにちがいない。また、これまでジョゼフの肉体的高揚が頂点に達したとき、いつもジョゼフが眠っていたことを今思いあわせてもよい。大かえでの樹の幹を枝でたたいたあと、ならびに、マック・アリスターをバンドで鞭打ったあと、ジョゼフは眠っていたし、同様に、モイラのベッドに身を投げたあと寝込んでいる²⁸⁾。ここから、モイラ殺害は、ジョゼフの肉体的高揚を示すこれら一連の行為の延長上にあると推察することができる。こうしてジョゼフの《violence》は性行為を経て、殺人行為にまでジョゼフをみちびいているのである。

プレローとの決闘、マック・アリスターへの暴力、モイラのベッドに身を投げるといふ行為、そして性行為と殺人行為に焦点をあわせながら作品を分析し、ジョゼフが肉なるものに向かうありさまを大ざっぱにみてきた。この過程でジョゼフの《violence》が観察された。要するにジョゼフは熱烈な信仰とともに、はげしい欲望をも持ちあわせた存在なのである。

3. 《violence》と信仰との関連

本論第一章で、ジョゼフの中の、神を志向する部分を、第二章で肉なるものを志向する部分を検討した。この検討の過程でジョゼフが狂信的(fanatique)と形容できるほどのはげしい信仰の持ち主であるとともに、情熱・欲望のはげしさ、つまり《violence》をうちにかかえて生きていることをみた。それでは、ジョゼフの欲望と信仰とは、あるいは、《violence》と宗教とはどのように関連しているのだろうか。私たちはこの章において、この問題についての考察を中心に論をすすめていきたい。そのことのために、作品にあらわれたく火〈またはく光〉のイメージを最初にしらべることにしたい。あわせてく燃える〉という隠喩を抽出し、分析したい。次いで作中、violenceという語が用いられた、ジョゼフの言葉をひき合いに出す。ここから、ジョゼフのうちには二つのviolenceが存在するのだという仮説が提出されるだろう。だが、ジョゼフの内面の動きを示すものとして、宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだを揺れうごく場面、すなわち、前者から後者に、あるいは逆に、後者から前者へと瞬間的に移行する場面、さらに両者がまじりあっている場面をとりあげて吟味すると、この仮説の正当性はくずれるだろう。そこでさらにもう一度、ジョゼフの《violence》が顕在化した場面を分析し、《violence》の意味を考察したい。それから犯罪後のジョゼフの生の歩みをたどり、ジョゼフの救いの問題について考え、さいごに《violence》と信仰の関連性に言及し、この二つの関係を明らかにしたいと思うのである。

(1) く火〉〈またはく光〉のイメージ

まず、これまでにみたく火〉またはく光〉にまつわる表現を振りかえっておこう。『ロメオとジュリエット』の恋人たちにジョゼフは反撥していたが、彼らが愛の情熱・欲望のとりこになっているありさまを、ジョゼフは、「裁きの炎によって永遠に焼かれながら」(sous l'éternelle morsure de la flamme justicière, I-8, p.39)という言い方によって把握していた²⁹⁾。ここでの「裁きの炎」は恋人たちの内なる情熱・欲望を指し示す。そして「裁きの」という形容詞がついていることから、この「炎」は地獄につきおとすもの、あるいは地獄の火そのものと考えられていることがわかる。く火〉にかんする表現は、第二部第二十章、ジョゼフがはげしい伝導熱に揺りうごかされるどころでも用いられていた。すなわちジョゼフは、「何ものも消し去ることのない炎(flammes)から彼ら[人びと]を救い出すこと」を自分の「天職」(p.157)だと考え、デーヴィドに、「ここでもまた(…)

数知れない魂が永劫の火(feue éternel)に焼かれる危険にあるのだ」(p.159)と語っている³⁰⁾。この「炎」そして「永劫の火」はどちらも、人びとにとりつき、人びとを罪におちいらせ、地獄につきおとす情熱・欲望の火であると解釈することができる。また、ジョゼフの内面を象徴するものとして、モイラとの肉体の交わりおよび殺害ののちにジョゼフが眠り、そしてめざめたときの天井の光の描写があった(II-21、p.173,174)。天井を照らす「火事のような光(lueur)」(p.174)は、性行為の間際、ジョゼフがモイラと争っている折に、ベッドからころがりおちたランプが投げかける光であり、ジョゼフの情熱・欲望もしくは《violence》を暗示し、象徴している³¹⁾。

とはいえ、ジョゼフの内面を象徴するものとして何よりもまず彼の〈赤毛〉を挙げなければならないだろう。第一部第四章でジョゼフは大学構内で学生たちから自分の〈赤毛〉を〈火〉または〈火事〉(feu)にたとえられ、からかわれている(p.14)³²⁾。〈火〉を連想させる、ジョゼフの赤毛は目立ち、人びとの注意をひくのだ。すでに作品冒頭から、ジョゼフの赤毛はデア夫人の目をとおして観察され、描写されている。

「心ならずも彼女[デア夫人]には、彼[ジョゼフ]が赤毛であるにもかかわらず美しく思われた。その炎のような髪、牛乳のように白いその顔色、それが彼女の心をかき乱すのだった。彼女は、彼が自分にいだかせる或る種の嫌悪感を悟られないように感情をおさえた」(I-1、p.3)。

ここでデア夫人はジョゼフの顔色の白さとともに、「炎のような髪」(chevelure de flamme)、つまり髪の赤さに注目している。この白と赤の対照は重要だろう。白はジョゼフの純粹志向、というより純粹さに対応し、赤はジョゼフの純粹さにもかかわらず、彼のうちで眠っている《violence》を暗示すると考えられる。デア夫人のいづく「嫌悪感」は、ジョゼフの純粹さの背後にひそんでいる情熱・欲望のはげしさを本能的に感じとったことへの反応だとうけとれる。このように〈火〉あるいは〈炎〉のイメージと結びつくジョゼフの赤毛は、彼の内なる《violence》を象徴している。そして作品冒頭に置かれた「炎のような髪」という描写は、のちに繰り返される、ジョゼフの《violence》のドラマを告知しているといえよう。

〈火〉のイメージは、作中、ジョゼフの内面それじたいを表現する際にも利用されることになる。第二部第二十章、モイラへの情熱にひき裂かれたジョゼフは、自己の内面の状況を、平穩のうちに生きるデーヴィドの現状と比較しつつ、デーヴィドに語っている。

「(…)ぼくは欲望の人間だ。そのためぼくは君よりも恩寵をうしなう危険にさらされているし、ある意味では君が今後そうなる以上に地獄に近づいているのだ。君は、地獄が何であるかを知らない。でもぼくは知っている。なぜならば、火(feue)が何であるかを知っているから。火はぼくの祖国だ」(p.160)。

このようにジョゼフは、自己の内面のありさまを〈火〉という語あるいはイマージュを使って言いあらわしている。この〈火〉は地獄につづじるものであるから、言うまでもなく、情熱・欲望に支配されたジョゼフの内面、彼の内なる《violence》を指し示している。しかしながら、ジョゼフの内面の〈火〉、「火はぼくの祖国だ」と言うときの〈火〉は、単に情熱・欲望だけと関係するのであろうか。恩寵をうしなわせ、地獄へとジョゼフをみちびくものだけであらうか。ジョゼフがデーヴィドに話した言葉のつづきをよむとき、けっしてそうではないことがわかる。

「ぼくは一度、子どものころ、神の存在という赤熱する燵の中に投げ入れられたことがある。ぼくはエマオの使徒たちの心に感じられた火傷のような痛み³³⁾が何であるか、そして五月二十四日の夜、ウェズリーの心に感じられた火傷のような痛み³⁴⁾が何であるかを知っている。だが、神の不在によって燃え上がる燵もあるのだ。というのも、神は火であるからだ、デーヴィド、そして神が火であることといたら、その非存在の恐怖もまた、火によって、黒い火によって表されるほどなんだ…」(p.160)。

ここで述べられていることはきわめて難解である。けれども、大ざっぱに言えば、二つの種類の〈火〉があることをジョゼフは語っているように思われる。ひとつは、「神の存在という赤熱する燵」(le brasier de la présence de Dieu)とあるように、神の存在によって燃え上がる火であり、もう一つは、「神の不在によって燃え上がる燵」(le brasier allumé par l'absence de Dieu)と述べられているごとく、神の不在によって燃え上がる火である。あとのほうの火は「黒い火」(feu noir)とも言われているが、おそらく地獄の火であり、神を見うしない、情熱・欲望にはげしく責めさいなまれるありさまを暗示していると解することができる³⁵⁾。これにたいして、神の存在によって燃え上がる火とは、「神」が「火である」とジョゼフが語っていることと照らしあわせて、神をはげしくもとめ、神をみいだし、実感する内面のありさまを示唆しているとみなすことができる。そして神を追いもとめるはげしさがジョゼフに、神を〈火〉なるものに知覚させていると考えられるのである³⁶⁾。このように〈火〉という表現ないしイマージュは、肉なるものを志向する心的状態とともに、神を志向する心的状態を指し示すものとして用いられているのである。

この点に関連して、〈火〉にかかわる言葉である〈燃える〉(brûler)という動詞

が、ジョゼフの内心の状態をあらわす語として使用されていることに注意をはらうべきだろう。第二部第十七章で、モイラへの欲望を自覚したジョゼフは、デーヴィドに次のように胸襟をひらいている。

「君のほうは神さまをみいだした。神さまはけっして君から離れることはないだろう。でもほくはありとあらゆる瞬間に、神さまをうしなうのではないかとびくびくしているんだ。なぜって、ほくは目のところまで罪の中に沈んでいるような気がするからだ。デーヴィド、ほくは燃えているんだ(Je brûle)」(p.148)。

さいごの文で〈燃える〉(brûler)という動詞がみとめられる。この〈燃える〉という語は、神から離れ、罪ある情熱・欲望にとりつかれ、呻吟するジョゼフの内面をひき立たせている。また、第二部第二十章では、ジョゼフが自らの狂信的な信仰をデーヴィドに打ち明けるところで、〈燃える〉という語がみいだせる。

「子ども時代から、ほくはほとんど天国と地獄のことしか考えたことはなかった。ほくは、神から見放された人びとが怒りと憎しみに燃える(brûlent de colère et de haine)ように、選ばれた者たちが愛に燃えている(brûlent d'amour)ことを知っている。ほくは聖書を読むとき、往々にして胸が燃えたつ(s'embraser)のを感じる。デーヴィド、ほくらは燃え上がるだろう(nous brûlerons)、永遠のよろこびの中で燃え上がるだろう(brûlerons)」(pp.160-161)。

この一節ではまず、「怒りと憎しみに燃える」「愛に燃えている」といったように、〈燃える〉(brûler)という動詞は、二つの異なる状態を示すものとして用いられている。最初の〈燃える〉は、「怒り」とか「憎しみ」といった情熱に支配された状態をあらわし、この情熱も肉体的欲望と同様に、神からひき離し、地獄にみちびくものと考えるがゆえに、ジョゼフは「怒りと憎しみ」にもてあそばれる人びとを「神から見放された人びと」と規定するのであろう。あとの〈燃える〉のほうは、まぎれもなく神への愛と隣人への愛、要するに信仰に心が高揚する状態を指し示している。そしてこのあと、ジョゼフは自己の内心の動きを示す隠喩として、brûlerの類義語であるs'embraser(燃えたつ)という動詞を使っている。この動詞は聖書の読書との関連で用いられているのであるから、ジョゼフの内心で生じた宗教的高揚を言いあらわしている。さいごに、「燃え上がるだろう」というように、brûlerの単純未来形が二度使用されている。この語は、熱烈に神をもとめ、宗教的なよろこびにひたるありさまを表現していると思われる。このように『モイラ』において、〈火〉(あるいは〈光〉)のイメージと同じく、〈火〉を連想させる〈燃える〉(brûlerまたはs'embraser)という隠喩もまた、肉なるものを志向する心的状態とともに、神を志向する心的状態を指し示しているのである。

(2) 二つのviolence?

こんどは、作中、violenceという語が用いられた箇所を検討することにしたい。この語は、ジョゼフがデーヴィドに話しているところでみいだされる。第二部第十七章、ジョゼフは、デーヴィドが結婚することに反対したことをかえりみて³⁷⁾、こう語っている。

「ぼくは君のことを悪く考えていた。君が結婚の中に、ただ肉体の飢えの満足しかみていないと想像したんだ。なぜなら君は、ぼくがぼくじしんであるのと同じような人間であると思っていたからだ。(…)君はぼくのように罪を犯すことなんかできはしない。君には心の平和が永遠に与えられていて、君の中にはいささかの混乱もない。それにたいして、ぼくの中のすべてははげしき(violence)なのだ」(p.147)。

ここでviolenceなる語が用いられている。このviolenceが、はじめの定義どおり情熱・欲望のはげしさを意味することは疑いをいれない。モイラへの情熱・欲望にはげしく責めさいなまれる内面のありさまを、ジョゼフはviolenceという語によって表現しているのである。

ジョゼフは第二部第二十章、デーヴィドの信仰形態と対比しつつ、自己の信仰のあり方を述べている。このくだりでviolenceなる語がみいだされる。

「君は主を平安のうちに愛している。だがぼくにあるのは神の怒り [神へのはげしい欲求] (la rage de Dieu)なのだ。ぼくははげしきでもって(avec violence)しか愛することができない。なぜなら、ぼくは欲望の人間だから」(p.160)。

上の文章で、la rage de Dieuは「神の怒り」とも「神へのはげしい欲求」とも訳せることを、最初にことわっておきたい。ジョゼフが「神の怒り」を感じつつ生きているのは、自らの肉体的な欲望にたいして強烈な罪の意識をいだいているからにはかならない。だからこそ、ジョゼフは、デーヴィドのように「平安のうちに」神を愛するのではなく、「神へのはげしい欲求」をおぼえつつ、言いかえれば、熱狂的な愛によって、神を愛し、もとめるのであろう。したがって、「はげしさをもって」愛するとジョゼフが言うときの愛の対象は、言うまでもなく神である。とすれば、ここでのviolenceは当然、宗教的狂熱、信仰のはげしさを意味するのである。

このように、ジョゼフが使っているviolenceという言葉は、〈火〉のイマージュおよび〈燃える〉という隠喩がそうであったように、二つの心的状態を指し示している。情熱・欲望のはげしきと信仰のはげしき、同じことであるが、肉なるものを志向するviolenceと神を志向するviolence、である。ここから、ジョゼフのう

ちには二つのviolenceが存在していて、この二つが葛藤しているという仮説が成り立つ。もう少し説明すれば、肉体と魂とが相容れないように、もしくは敵対するように、欲望のはげしきの反動のエネルギーとして靈的なはげしきが生じ、両者がジョゼフの内部で対立し、争っているというふうに一応考えられるのである。そしてこの仮説を受け入れるならば、先にしらべたく火> (または光>) のイメージ、それに<燃える>という隠喩は、二つのviolenceを象徴するものとして用いられているということになるのである。

(3) 宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき

ところで、『モイラ』はジョゼフの宗教的高揚(信仰のたかまり)と肉体的高揚(欲望のたかまり)とを交互にえがきながら展開しているけれども、作中、ジョゼフが宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだを揺れうごく場面、言いかえれば、宗教的高揚から肉体的高揚へと、あるいは逆に、肉体的高揚から宗教的高揚へと瞬間的に移りゆく場面がしばしばみられる。そこで、こうした瞬間的移行を示す箇所を取りあげることによって、上に述べた仮説が正しいかどうか検証していきたい。

第一部における、ジョゼフのプレローにたいする感情の揺れうごきを問題にすることからはじめよう。まず第一部第五章で、瞬間的な移行を示すくだりがある。この章は、すでにふれたように、ジョゼフがプレローと決闘し、そのあと大かえでの樹の幹をたたきまくるところである。ジョゼフの肉体的高揚がはじめて最高潮に達するところであるが、問題の箇所はプレローとの決闘の場面の直前にみいだされる。すなわち、ジョゼフはプレローの挑戦に応じて、東アーケード街四十四番地のプレローの住まいを訪れる。しかしプレローが不在なのを知って、ジョゼフは近くの芝生に寝ころび、プレローの帰宅を待つ。その間のジョゼフの心の動きは、次のようにえがかれている。

「必要なら一晩中でも待ってやろう」と彼は思った。

一晩中。いったい自分はあいつ [プレロー] を嫌っているのだろうか。だが問題はそれほど単純ではなかった。あいつを嫌っているのではない、ただあいつをなぐりたいただけなのだ。心ならずもこの見方は彼をほほえませた。自分はプレローの横柄さをゆるしているのだ、ほんとうにそれをゆるしているのだ。もし許さないのなら、福音書を読んだところで何になるのだろうか。しかし時どき、怒りの発作が頭をくらくらさせた。悪人たちを叱責し、必要とあれば彼らの幸福のためになぐることは、彼には義務のように思われた。たとえ怒っても、罪を犯さないことだってあり得るのだ。福音

書は言っている、〈理由もなく兄弟にたいして怒る者は…〉」(p.21)。

上の一節ではまず、「ただあいつをなぐりたいたけなのだ」とあるように、肉体的高揚がみられる。なぜなら、この暴力への欲求は、プレローへの自覚されない愛の感情が報われなかったことに根ざしており、欲望のはけ口とみなされるからだ。次いでジョゼフは、プレローへの許しの感情にかられている。この許しの感情は、「もし許さないのなら、福音書を読んだところで何になるのだろうか」と考えられているごとく、聖書・福音書の教えとのかかわりで生じている。それゆえ、この感情は宗教的な高揚を示しているといえる。このあとジョゼフは、「怒りの発作が頭をくらくらさせた」と書かれているように、怒りの激情にとらえられている。この怒りは欲望と結びついていることから、ジョゼフの内面はふたたび肉体的高揚に揺れうごいたわけである。けれどもこの肉体的高揚の中で、ジョゼフは「たとえ怒っても、罪を犯さないことだってあり得るのだ」と考えて、自らの怒りを宗教的な次元で正当化しようとしたり、福音書の記述³⁸⁾を思い出して、怒りをなだめようとしたりしている。ということはすなわち、肉体的な高揚のなかに、わずかな程度であれ宗教的な高揚がまじりあい、あるいは介入したことになる。したがって、全体をまとめてみると、上の一節では、肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行、そして宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行、さらには肉体的高揚の中への宗教的高揚のまじりあい、もしくは介入がみとめられるのである。

次に、第一部第七章における、プレローにたいするジョゼフの感情を検討してみることしよう。プレローとの決闘の翌日のことを語ったこの章で、ジョゼフはギリシャ語の授業中、プレローのことや彼との決闘の場面を思い出している。

「ジョゼフは自分の意に反して前日のつらい場面を、鞭のように自分の顔を切り裂くような気がしたあの声を思いうかべた。〈君はこわいんだ…こんどはぼくが君を足もとにのばしてやろうじゃないか…〉。制禦しがたい怒りが彼の胸にこみあげてきた。彼は血管が喉もとでふくらみ、血がどくどくと脈打つのを感^レじた」(p.34)。

ここでジョゼフはプレローにたいする「制禦しがたい怒り」をあじわっている。この怒りは、繰りかえして言うように、欲望の屈折したあらわれである。そして「彼は血管が喉もとでふくらみ、血がどくどくと脈打つのを感^レじた」という生理的な次元の叙述は、ジョゼフが肉体の力、欲望のエネルギーに支配されているありさまを如実に示している。それゆえ、この箇所は、ジョゼフにおける肉体的高揚をかいまみせている。

さて、このあと、ジョゼフは気分が悪くなり、教室を出て、地下にある便所にかけてこみ、吐き気をもよおす。そして階段をあがり、建物の一階の玄関のところ

にたどりついたとき、ジョゼフはこう考えている。

「もっとも単純で、もっともキリスト教徒的なことは、遺恨をすっかり忘れ、プレローへの怨みを一切捨て去ることだろう。唇の上で言葉がほとんどひとりでつくられていった。〈ぼくは君のことをもう怨んではないよ、ブルース〉と、彼はそっときさやいた」(p.36)。

ここではジョゼフは、キリスト教徒の名においてプレローへの怨みを忘れようとしている。換言すれば、プレローへの怒りを抑え、プレローのことを許そうとしている。「ぼくは君のことをもう怨んではないよ」(Je ne t'en veux plus)という言葉は、キリスト教的な隣人愛にうごかされたジョゼフの気持ちをあらわしているだろう。それゆえ上の記述はジョゼフの内心の宗教的高揚をわずかながらもしるしづけている。かくして肉体的高揚から宗教的高揚への揺れうごきがみられることになる。とはいえ、先の引用文からうかがえた肉体的高揚から、ここで宗教的高揚にいたるまでには、一定の時間のへだたりが介在している。教室を出て、便所に入り、一階玄関に行くまでの時間である。けれどもジョゼフはこの間、プレローへの怒りないし怨みを持続させているのではないだろうか。ジョゼフが便所の中で吐き気をもよおしているとき、「彼は噴怒を病んでいたので」(p.35)と説明されているところからわかるように、ジョゼフの嘔吐感、彼が相変わらずいだきつづけている怒りの激情に起因しているし、それに、「プレローへの怨みを一切捨て去ること」という語句や、「ぼくは君のことをもう怨んではないよ」という言葉は、宗教的高揚の瞬間まで怨みをかかえてきたことを逆に証拠立てているように思われる。というより、宗教的高揚の瞬間においても、ジョゼフは怨みあるいは怒りをいだきつづけているときえみることができないのではないだろうか。つまり「ぼくは君のことをもう怨んではないよ」という言葉は、プレローへの怨みもしくは怒りが存続しているからこそ言われたのだと解することもできるのである。とすれば、第一部第七章でも、プレローへの感情の揺れうごきをおして、肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行、または、肉体的高揚の中への宗教的高揚の介入・入りまじりがみいだされるのである。

第一部第十三章においても、プレローにたいする同様の感情の揺れうごきがみられる。授業科目の変更を願い出するため³⁹⁾、ジョゼフは夜、指導教官のタック先生のところに行く。そして客間で先生がくるのを待つあいだ、プレローのことを考えている。

「プレローのことはけっして思い出さないほうがよい。心の中に怨みしかひきおこさないのなら、この名を記憶から抹殺したほうがよい。しかし一方では、敵のために

祈らなければならぬ」という気もした。そして実際、彼は力のかぎり両手を組み合わせ、思った、く主よ、プレローにあなたの祝福を与えたまえ。だが熱意の足りなさが彼に恥ずかしい思いをさせた。(…)心の奥底では、プレローに神の祝福がくだるのを見たいという気持ちはさらさらなかった。なによりも望むのは、彼の顎を打ち砕くことだった」(p.71)。

ジョゼフはまず、「心の中に怨みしかひきおこさないのなら、この名を記憶から抹殺したほうがよい」と考えているところから察知できるように、プレローにたいして怨みの感情をいだいている。この怨みは、第七章における先程の怨みと同じように、愛の裏返し感情であり、肉体的高揚のあらわれである。それからジョゼフは、「敵のために祈らなければならぬ」と思い、事実プレローのために祈っている。この祈りはキリスト教隣人愛にもとづくものであり、宗教的高揚を示している。しかしこの祈りもむなしく、「なによりも望むのは、彼の顎を打ち砕くことだった」と書かれているごとく、ジョゼフはまもなくプレローへの暴力の欲求にとらえられる。この暴力への欲求が肉欲の屈折したはげ口であり、肉体的高揚をあらわしていることは指摘するまでもない。したがって、ここでは肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行、つづいて宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行がみられるわけである。しかしながら、この一節でのジョゼフの内心は、先にひき合いに出した第七章の部分と同じく、プレローへの怨み・怒りを基調としているとみることもできる。この怨み・怒りが継続する途中で、祈りの義務感が生じたとも考えられるのだ。とすれば、この箇所は、肉体的高揚の中への宗教的高揚の介入・入りまじりが問題であるともいえるのである。

ここまで、プレローにたいするジョゼフの感情を描写した部分を分析してきたのであるが、肉体的高揚と宗教的高揚とのあいだの揺れうごきは、第二部第六章の、ジョゼフが服を脱ぐ場面からも観察される。この章において、かつてモイラの所有物であったベッドに身を投げることで、ジョゼフの肉体的高揚が頂点に達することはすでに述べた。この直前、ジョゼフは自分のからだとかかわりで、二つの高揚を短い時間のうちにつづけて体験するのである。すでに一部分は引用したことがあるけれども⁴⁰⁾、ジョゼフが服を脱ぐところは次のように語られている。

「薄暗がりの中で彼は伸びをした。そして疲れのためにあくびをした。それからワイシャツを脱ぎ、ベルトをはずし、ズボンを足もとに滑り落とした。子どものころから、彼は暗闇の中で服を脱ぎ、いつも自分のからだに目をやらないようにしてきた。しかし今夜だけは、四肢の白さを見ないではいられなかった。たとえ明かりがなくても、腕や膝のかたちが見わけられた。昔、父親は自分に教えたものだ、肉体は地獄に

人をみちびき、魂は天国に連れていくと。そのとおりだ、肉体はキリスト教徒の敵なのだ」(p.106)。

上の記述で、「子どものころから、彼は暗闇の中で服を脱ぎ、いつも自分のからだに目をやらないようにしてきた」という文章がまず注目される。この文章はもちろん、ジョゼフの日頃の習慣を伝えている。しかし同時に、服を脱いだ時点でのジョゼフの心の動きをも言いあらわしている。自分のからだに目をやるまいとする心の動きである。この心の動きは肉なるものへの反撥と等価なものであり、純粹志向・ピューリタニズム的態度をのぞかせているがゆえに、一種の宗教的高揚のあらわれといえる。だがこのあと、「今夜だけは四肢の白さを見ないではいられなかった」と書かれているように、ジョゼフは自分のからだを見たいという誘惑にかられている。この誘惑は、一定程度、ジョゼフの内心の肉体的高揚をかいまみせている。ところがジョゼフは、腕や膝の輪郭をたしかめたのち、父親の教えを思い出し、「肉体はキリスト教徒の敵なのだ」と自分に言いきかせている。この部分は、宗教との関連で肉体敵視の思想が表明されているので、明らかに宗教的高揚を示している。それゆえ、この場面からは、宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行、さらに肉体的高揚から宗教的高揚への瞬間的移行がみいだされるのである。

同様に、ジョゼフがモイラのベッドに身を投げるにいたるまでの内心の動きにも注意をはらうべきだろう。そこで、服を脱いでからのジョゼフのふるまいを確認しておきたい。

「彼は寝巻を着、祈りをとなえるためにひざまずいた。しかしいそいで、そして早く終わりたいというひそかな欲求をいだいて祈りを朗唱した。主の祈りをとなえている最中に、ベッドの位置を変えようという奇妙な考えが心にうかんだ」(p.106)。

このようにジョゼフは祈っているとき、「ベッドの位置を変えようという奇妙な考え」が心にうかび、そしてまだ見ぬモイラへの欲望に支配されてベッドに身を投げるわけである。ジョゼフの祈りは熱心なものではないとはいえ、先の肉体敵視の考えの延長上にあり、やはり宗教的高揚を顕在化させている。したがって、ここでは宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行がみとめられる。そうすると、服を脱ぐ場面から合わせると、二つの高揚をめぐって三度も瞬間的移行が観察されたことになる。けれども、さいごの瞬間的移行においては、祈りの最中にベッドの位置を変えることが思いつかれていることから、宗教的高揚のただ中で肉体的欲望が生じたといえ、宗教的高揚と肉体的高揚とがまじり合っているとみることもできるのではないだろうか。また、第二部第六章全体を視野に入れて服を脱

ぐところからベッドの位置を変えるところまでの部分を考えると、サイモンの死を知ってからジョゼフの内心を支配するのは基本的には肉体的欲望であるから、肉体的な高揚の中に宗教的高揚が介入し、入りまじっているという見方をすることも可能なように思われるのである。

瞬間的移行は、第二部第九章、ジョゼフがモイラへの思いにとらえられるところでもみいだされる。この章では、デーヴィドのいるファーガスン夫人の下宿にジョゼフがかわった日の夜のことが語られている。ジョゼフは前日の晩、デア夫人の下宿でモイラのベッドに欲望をいだいて身を投げたことが忘れられず、自分のおかした罪をあがなうために、ベッドではなく床板の上に寝る。このときの、ジョゼフの心の動きは次のように書き記されている。

「くほくの肉体は苦しいけれど、魂は平和だ」と彼は考えた。手足に感じるこの苦痛を、何というよろこびをいだいて主にささげることだろう。彼は、拷問のなかで信仰を告白する自分の姿を想像し、大きな満足をいだいた」(p.115)。

この部分はジョゼフが自らの肉体の苦痛を神にささげようとしていることから、信仰のたかまり、宗教的高揚を明示している。だが、ジョゼフはこうした苦行のさなかに、女中ジェマイマの言葉を思い出し、モイラへの想念にとりつかれるのである。

「くモイラお嬢さまはきれいな方ですよ……。年とった女中のこの月並みなことばが格別の魅力を付与されて、彼の脳裡によみがえった。心ならずも彼はモイラのことを思い浮かべようとした。わけても彼女の肌は美しく、すっかり琥珀色に輝いているにちがいない。そして目はあかるく、胸は、隠されたあのからだの一部、胸からみられるものは…」(p.117)。

ジョゼフはここで、まだ見ぬモイラの肉体を想像している。ということは、ジョゼフはモイラへの肉体的欲望に支配されたことになり、結局、第二部第九章では、宗教的高揚から肉体的高揚への瞬間的移行がみとめられるのである。とはいえ、モイラへの想念が、床板の上に寝るといふ苦行のさなかに生じていることから、上の記述は、宗教的高揚の中への肉体的高揚の介入・入りまじりを示していると解することもできるのである。

以上、宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき、すなわち、前者から後者への、あるいは後者から前者への瞬間的移行をあらわす箇所を列挙し、分析してきた。ではいったい、この瞬間的移行は何を意味するのであろうか。言うまでもなく、この移行はジョゼフにおける肉体と魂との深刻な対立、熾烈な葛藤を端的に物語っている。しかしながら分析の過程で、問題の箇所が、肉体的高揚の

中への宗教的高揚の、もしくは、宗教的高揚の中への肉体的高揚の介入・入りまじりの現象としても理解できることを指摘してきた。この介入・入りまじりの現象は、宗教的高揚と肉体的高揚とが単純な敵対の、または二律背反の関係にはかならずしもないということを示唆しているのではないだろうか。結局ここまでの検討から、宗教的高揚と肉体的高揚とは、信仰と欲望とは、もちろん対立関係にあるけれども、相剋のなかでたがいに重なりあう部分をも有していると判断できるように思われるのである。こう考えると、先に提示した、二つのviolenceという仮説の正しさは若干揺らいでくる。というのも、この仮説は信仰と欲望との図式的な二元論に立脚しているからである。

(4) 宗教的高揚と肉体的高揚との混淆

さて今度は、宗教的高揚と肉体的高揚とが純粹にまじりあっていると思われる場面を取りあげてみたい。同一の行為、同一の心の動きが同時に宗教的高揚と肉体的高揚とをあらわしているようにみえるところを問題にしたいのである。作品の記述の順序にしたがうならば、問題の箇所として、第一部第十章、ジョゼフが突然の幸福感におそわれるところがまず挙げられる。この章は、ジョゼフが白い木蓮の花の匂いをかいで官能的なよろこびを体験した第九章のあとにつづく章であり、第九章の時点から数日後の出来事を物語っている。ある朝、ジョゼフは授業がおわってデーヴィドと散歩しているとき、不意に得体の知れない幸福感をあじわう。このくだりは、次のように書かれている。

「これほどまでに美しく晴れ、金色に輝いた一日を、誰も想像することはできないだろう。そしてジョゼフは不意に人生にたいし、また生きとし生けるものたちにたいして、心の高揚のようなものを感じた。自分のぐりに存在するありとあらゆるものにたいして、漠然とした愛情を感じた。(…)

——デーヴィド！ と彼は叫んだ。時として君はしあわせに、訳もわからずにしあわせに感じることはないかい？ ぼくはそう感じると笑いたくなるんだ、ちょっとばかり子どもが笑うみたいに、はっきりとした理由もないのに…」(p.54)。

ジョゼフが突然の、不可解な幸福感におそわれていることは、「時として君はしあわせに、訳もわからずにしあわせに感じることはないかい？」とデーヴィドに問いかけているところから明らかである。では、この幸福感はいかなる性質のものなのであろうか。宗教的なものなのか。それとも肉体的なものなのだろうか。結論的にいえば、ここでの幸福感は両方の性質をあわせもっているように思われる。このことを説明しよう。ジョゼフはデーヴィドに話しかける寸前、「人生」や

「生きとし生けるもの」にたいして一種の「心の高揚」(élan)をおぼえている。こうした「心の高揚」は、一方では、信仰をもつことによって与えられ、神とともに居るのだというたしかな自覚とともに生じると考えられる。信仰によって生きることの幸福感がこうした「心の高揚」をささえていると思われるのである。とすれば、ジョゼフの「心の高揚」はまづもって宗教的なものである。しかしながら、他方、この「心の高揚」は、ジョゼフが太陽の光をあびて、地上に生きることのよろこびを感じたことに立脚しているともみなされる。こうしたよろこびは感覚的・官能的な性格を有し、神からジョゼフをひきはなすものだともうけとれる⁴¹⁾。つまりジョゼフがここであじわうよろこび・幸福感は前章(第九章)でえがかれているような、木蓮の花の匂いもたらす官能的なよろこび・陶酔の延長上に位置づけられると解することもできるのである。ここから、ジョゼフの「心の高揚」は宗教的なものであると同時に地上的=肉体的なものであるともいえよう。こうして第一部第十章における突然の幸福感は、宗教的高揚と肉体的高揚の混じり合いを示しているのである⁴²⁾。

この混じり合いは、第一部第十二章、ジョゼフが『ロメオとジュリエット』の本をひき裂く場面からも読みとれるのではないだろうか。すでにふれたように、ジョゼフは『ロメオとジュリエット』の中の恋人たちに反撥し、情熱にもだえる恋人たちを宗教的に断罪していた。そしてジョゼフはこの作品を読みつづけるうちに、意味不明の箇所にもぶちあたる。そこで彼は、たまたま自分の部屋を訪れたキリグラーに質問する。問題の箇所が猥褻なことを暗示していることが判明する。それでジョゼフは怒り、書物をひき裂くのである。

「そのとき、開いた本を両手でつかんで、若者は二つにひき裂いた。それから激怒の表情をうかべて、その本を床の上に投げつけた」(p.70)。

この場面は、ジョゼフの肉体敵視、あるいは純粹志向・ピュリタニズム的態度を浮き彫りにする例としてすでにひき合いに出した⁴³⁾。実際、本を「二つにひき裂く」という行為は、ジョゼフの肉なるものへの反撥のすさまじさを露呈しており、ここから当然、宗教的高揚がうかがえる。しかしながら、この行為をひきおこす、ジョゼフの「激怒」(fureur)のなかには、抑圧された欲望が入りまじっているのではないだろうか。ジョゼフの怒りが欲望と結びついていることは、これまでに再三再四指摘してきた。ここでの「激怒」についても同様だと思われる。というのも、本を「二つにひき裂く」という行為は、肉なるものへの反撥、ないしは純粹志向・ピュリタニズム的態度にもとづくとしても、ジョゼフの内部に宿る肉体の力を前提とし、看取させるからである。ごく常識的に考えて、本を二つにひき裂

くことは普通の人間にとって不可能ではないにしても、少なくとも困難である。しかしジョゼフはこれをいとも容易にやりとげている。こうした行為を可能にするのは、ジョゼフの内部に蓄積された肉体の力、欲望のエネルギーにほかならない。つまり肉なるものへの反撥のすさまじさのなかには、抑圧された欲望のはげしさが混入していると考えられるのである。したがって、『ロメオとジュリエット』の本をひき裂くという行為をとおして、宗教的高揚と肉体的高揚との混淆がみとめられるのである。

さいごに、第二部第十一章においてジョゼフがモイラのことを思い出すところを取りあげることにしよう。前章（第十章）で、ジョゼフは置き忘れたセーターを受けとりにデア夫人の下宿屋に行った際、モイラをはじめて見た。第十一章は、モイラと別れてからのジョゼフの行動をたどっているのであるが、チャーサーにかんする講義に出ているとき、ジョゼフは早速モイラのことを思い出すのである。

「じっさい、心ならずも、彼の記憶は、モイラと出会ったときのありさまのすべてをたどり直していた。あの横柄で、高慢ちきで、ちっぽけな女、それがまさしく彼女なのだ…。(…)異邦の女、まさにそのとおりだ。遠い異国の女だ。黙示録に出てくる淫売婦のように赤い服を着、唇に口紅を塗りたくって。彼はセーターをひろうため彼女の前で背中を曲げている自分の姿を思い出した。彼女の口をそのざらざらした毛糸の服でこすってやったら、なんという悦びであることだろう。彼女を殴り、罰したなら、そうだ、彼女の傲慢さを罰したなら、なんという恐ろしい悦びであることだろう。こう考えると血が頭にのぼってくるのだった」(p.125)。

ここでジョゼフは、意に反してモイラへの思いにとらえられ、そしてセーターを拾ったときの自己の屈辱的な姿勢を思い出して、噴りの感情にかられ、暴力への欲求にとらえられている。この暴力への欲求は怒りの感情とともに肉体的な欲望と結びついている。モイラにたいするジョゼフの反撥は、プレローへの反撥がそうであったように、執着の裏返しのアラわれにほかならない。さいごの「血が頭にのぼってくるのだった」という文章は、ジョゼフの内部の欲望のたかまり、肉体的高揚を如実に示している。とはいえ、上の一節で「黙示録に出てくる淫売婦のように」という直喩からわかるように、ジョゼフがモイラを黙示録の淫売婦になぞらえ、モイラの肉体性・官能性の象徴である赤い服と赤い唇に反撥している点は重要だろう。この反撥はモイラへの執着の裏返しの反応であるとしても、同時に、肉なるものへの反撥を意味し、ジョゼフの純粹志向・ピュリタニズムの態度に根ざしているのだ。そしてモイラへの暴力の欲求は、肉欲のはげ口としてだけでなく、宗教的な次元での処罰の欲求として生じていることもたしかなので

ある。とすれば、上の一節においてもまた、肉体的高揚と宗教的高揚との混じり合いをみてとることができるのである。

このように、宗教的高揚と肉体的高揚との混淆を示す箇所・場面を三つ取りあげ、検討をくわえてきた。この検討から、信仰と欲望との重なり合いがいつそう鮮明に浮かびあがってきた。したがって、ジョゼフにおける信仰と欲望とを安易に切り離し、両者の単純な対立・葛藤の図式によって、ジョゼフの内面のドラマを理解することは決定的なあやまりなのである。ここにおいて、二つのviolenceという仮説の正当性は完全にくずれる。そしてジョゼフにおいて信仰と欲望とが混じり合い、わかちがたくからまりあうことがあるという点を考慮にいれながら、ジョゼフの《violence》を再度分析することが是非とも必要な課題となってくるのである。

(つづく)

註

- 20) 目次の0. 1. および2. の(1)と(2)に該当する部分は、『『モイラ』再読のこころみ(1)——ジョゼフの《violence》の分析を中心に——』、山口大学「文学会志」第40巻、1989、pp.159-176を参照。
- 21) 白い木蓮の花の挿話については、上記の拙稿、p.173で分析した。
- 22) サイモンの死の知らせがジョゼフにおよぼす影響にかんしての、より詳細な議論は、拙稿『ジョゼフを取りまく人物たち(1)——ジュリアン・グリーンの『モイラ』について——』(山口大学「文学会志」第39巻、1988)のpp.62-63を参照。
- 23) 作中、次のように語られている：「くぼくがセーターを取りに行ったとき、それがプレローだったら、彼女[モイラ]だってくぼくに似たような口のきき方をする勇氣はなかっただろう」と彼[ジョゼフ]は考えた。くそれに彼なら決して彼女の前で身をかがめたりはしなかっただろう。大学に来て以来、自分の受けた屈辱の数々を思い出すと、彼は怒りの発作のためにかたく口を閉じた」(II-14、p.140)。
- 24) 授業中、横にすわっているテレンス・マック・ファドンがカトリック信者であることを知ったとき、ジョゼフはテレンス・マック・ファドンが「地獄の息子たちのひとり」であるがゆえに「救われぬ」(perdu)し、「天国は偶像崇拜者たちには永遠にとざされているのだ」と考えている(p.127)。
- 25) たとえば、モイラはジョゼフに飲み物を要求したとき、ジョゼフがアルコールではなく水をもってきたことに驚いている(p.165)。要するにモイラはジョゼフのうちに純粹さをみとめるのである。

- 26) モイラはセリナあての手紙のなかで、「あたしは楽しむための機械であることはもう沢山だわ。
 (…) あたしのほうこそ、恋をしているのよ」(p.169)と書いている。
- 27) ジョゼフの部屋に闖入したモイラは、ジョゼフがもどってきたのをみとどけてから、ドアに鍵をかけ、鍵を胸の中に隠していたのである。
- 28) 第二部第六章はジョゼフがモイラのベッドに身を投げるところでおわっている。そして第七章は、「午前一時ごろ、彼[ジョゼフ]はマック・アリスターの声で眠りからさました」(p.106)という文章ではじまっている。したがって、モイラのベッドに身を投げたあと、ジョゼフはしばらく眠っていたことになるのである。
- 29) 拙稿『『モイラ』再読のこころみ(1)——ジョゼフの《violence》の分析を中心に——』の中の1. の(2)、p.163を参照。
- 30) 上記の拙稿の1. の(3)のp.169を参照。
- 31) この点にかんしては、本稿2. の(4)、p.39で指摘した。
- 32) 学生たちの一人はジョゼフに次のような冗談を浴びせている：「諸君、君たちの中で誰か、この界隈にいる消防夫たちの住所を知っているだろうか。彼らに知らせておくのが賢明な用心だと思うが」(I-4、p.14)。
- 33) ここは、「ルカによる福音書」第二十四章の記述を踏まえている。周知のように、イエスが処刑されてから三日後、墓からイエスの亡骸が消えうせた。このことを二人の弟子たちがエルサレムからエマオという村に向かう途中で語りあっていると、復活したイエスが弟子たちのもとにあらわれ、旧約聖書の予言、すなわち、救い主は三日目に死人の中からよみがえり、人びとを悔い改めさせるという予言が実現したこと、自分こそ救い主であることを教えた。イエスの姿がみえなくなったあと、二人の弟子たちは、「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互いの心が内に燃えたではないか」(24-32)と言っている。使徒たちの、このような火の感知、あるいは「火傷のような傷み」(brûlure)は明らかにイエス・キリストの顕現によるものといえよう。
- 34) ウェズリー(Wesley, 1703-91)はメソヂスト派の創始者で1738年に回心を経験し、信仰の内面性を深め、以後熱心な伝道活動をおこなった人である。ウェズリーがあじわった「火傷のような痛み」もまた、イエス・キリストの顕現に起因するように思われる。
- 35) ちなみに、聖書でも、地獄は火のイメージによってえがかれている。たとえば、「マルコによる福音書」には、「地獄では、うじがつきず、火も消えることがない」(9-48)という記述がみられるし、「マタイによる福音書」において、「また、ばか者という者は、地獄の火に投げ込まれるであろう」(5-22)という一文を読むことができる。
- 36) 聖書においても、神は地獄と同様に火のイメージによって言いあらわされている：「あなたの神、主は焼きつくす火、ねたむ神である」(「申命記」4-24)。また、火は神をはげしくとめる心的状態を指し示している。「ルカによる福音書」のなかで、イエスは、「わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか」(12-49)と語っているが、ここでは、人びとの内心にやどるべき神への愛、信仰心

が火のイマージュによって表現されているのである。

- 37) ジョゼフは第二部第十二章、「結婚は危険な誘惑だよ」(p.130)と云って、デーヴィドの結婚に反対していた。拙稿『『モイラ』再読のこころみ(1)——ジョゼフの《violence》の分析を中心に——』の1. の(1)、p.163を参照。
- 38) 「マタイによる福音書」には、「兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならぬ」(5-22)という記述がみられる。
- 39) ジョゼフはシェークスピアを主題とする近代英語の講義を選択していた。しかし、『ロメオとジュリエット』の中の恋人たちへの反撥から、そしてさらに、この作品が猥褻な箇所をふくんでいることをキグルーから聞き知るにおよんで、ジョゼフはシェークスピアではなく、チャーサーにかんする授業に出ることに決めるのである。
- 40) 拙稿『『モイラ』再読のこころみ(1)——ジョゼフの《violence》の分析を中心に——』の1. の(1)、p.162を参照。
- 41) この点に関連して、グリーンが「大いなる拒絶」(le grand refus)と呼ぶ事件を思い起こすことは、あながち無駄ではあるまい。1916年4月のカトリシズムへの回心以後、グリーンは、クレテ神父の導きもあって、修道士になることを夢み、目指していた。だが1919年4月、グリーンは、コルタンペール街にある教会の地下礼拝堂から通りに出たとき、突然、修道生活の計画を放棄するのである。この放棄をグリーンは「大いなる拒絶」と呼んでいるのであるが、このいきさつは『日記』のなかで次のように回想されている：「その瞬間、大地全体が私にさし出され、自分が一種の中世からルネサンスの真っ只中に到達したように思われた。通りに、田舎風の魅力をもち、すっかり春の光にひたされたこの通りに出たとき、自分の人生が新しい方向に向かうように思われた」(*Devant la porte sombre, Journal III, 3 mars 1941, IV, p.571*)。ここでは、教会の暗闇から地上の明るみの中に出たとき、グリーンは修道士になることを断念するのであるから、地上で生きることのよろこびが「大いなる拒絶」をひきおこし、グリーンを神から遠去けたと考えられる。そしてジョゼフの「心の高揚」はこうしたよろこびと同じ性質のものをふくんでいるとうけとれるのである。
- 42) プレイアード版テキストの註釈者ジャック・プチ(Jacques Petit)は、この幸福感をとり上げて、「官能的な陶醉」と「宗教的な陶醉」とが「混じりあっている」とみなしている(《Notes pour *Moïra*, III, p.1579)。
- 43) 拙稿『『モイラ』再読のこころみ(1)——ジョゼフの《violence》の分析を中心に——』の1. の(1)、p.162を参照。

[付記] この小論は1987年後期、88年度前期フランス文学特殊講義「*Moïra*読解のこころみ」の講義ノートの一部を加筆修正したものである。作品からの引用に際して、福永武彦訳『モイラ』(人文書院版「ジュリアン・グリーン全集」第四卷所収)の翻訳を参照させていただいた。また、この小論の着想にかんして、Jean-Claude Joyeの*Julien Green et le monde de la fatalité*(Arnaud Druck, Berne, 1964)からとくに恩恵をうけたことを明記しておきたい。